

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19720088

研究課題名（和文）

身体の拡張としての道具を表すことばの対照言語学的研究

研究課題名（英文）A contrastive linguistic study of words denoting instruments
serving as body extensions

研究代表者 西田 光一（NISHIDA KOICHI）

東北大学・大学院情報科学研究科・准教授

研究者番号：80326454

研究成果の概要：人が道具などの譲渡可能所有物を自己の一部とすることが可能になった現代の知見に照らし、従来の言語研究で採用されてきた、譲渡可能所有物を表すことばと譲渡不可能所有物を表すことばの2分法を見直し、人は経験を通じ、自己の領域を身体部位から自分の社会生活を構成する道具や手段へ拡張することができることを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	150,000	1,150,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：語用論

1. 研究開始当初の背景

これまで意味論、語用論では、ことばと身体、ことばと空間・時間、ことばと行為、ことばと人間関係、ことばと性差・地域・職業など、それぞれのテーマで説明理論を開発してきた。しかし、先行研究では、ことばと道具、またはことばと道具の使い方の関係がほとんど議論されていなかった。この意味で、身体と譲渡可能所有物の中間段階に衣服などが位置すると指摘した角田（1991）の「所有傾斜」は、文法と所有物の関係に取り組んだ貴重な貢献である。角田が扱った「所有者敬語」をはじめ、人の道具の使い方は文法の諸相に反映されているが、ことばと道具の関係を包括的に扱うという視点が欠けていた。

Fillmore (1968) “The Case for Case” 以来、譲渡不可能所有物を表す名詞句は譲渡可能所有物を表す名詞句とは違った文法的特徴を示すことが論じられてきた。これは特に身体部位名詞について顕著であり、その特徴は多くが再帰代名詞にも該当する。身体部位と異物の違いは、一見、クリアなため、文法研究では譲渡不可能所有物を表す名詞句と譲渡可能所有物を表す名詞句の2分法が深く検討されることなしに受容されてきた。

本研究は、道具は自分の身体に近い異物であり、道具は身体部位と他者の中間に位置するという認識から出発している。この中間的位置づけを反映し、道具を表す名詞は、自分を表す名詞、つまり再帰代名詞の諸特徴を部

分的に共有している。このため、道具を表す表現の分析には同一文内の照応関係が応用できる。英語の再帰代名詞は基本的に動詞の目的語の位置に生じ、照応詞として同一節内の主語(先行詞)と同一指示の関係を結ぶ。このような同一節内の照応関係は節の構造を分析する上で極めて重要であり、Chomsky (1981) *LGB*, Reinhart and Reuland (1993) “Reflexivity” に代表される生成文法での「束縛条件 A」は、再帰代名詞の統語的分布を説明することを狙いとしている。

代名詞類を対象にした束縛条件の研究が深化する一方で、束縛条件の適用範囲を代名詞類以外の表現に広げようとする研究の流れがある。例えば、Jackendoff, Maling and Zaenen (1993) “Home” では、Mary took John home. という文では home は Mary の家を指すか John の家を指すかであいまいだが、Mary took John home with her. という文では、home は代名詞 her を介在して Mary の家を指す。従って、home は束縛条件 A に従う特徴を部分的に示す。また、Culicover and Jackendoff (1995) “Something Else” は、something else が先行詞以外のものを指す点で、同一文内照応を含んだ関係を担うと観察している。Culicover and Jackendoff は、同一文内の照応関係(束縛関係)は意味論的に決まるもので、代名詞類だけを扱う狭義の束縛関係に加え、非代名詞類の語彙項目で同一文内照応をなす表現一般を扱う広義の束縛理論が開発されるべきとしている。

日本語については、角田の所有傾斜と廣瀬(1997) 「人を表すことば」が提唱する「視点階層」が本研究に大きな関連性を有する。角田は、「会長のお召し物がお汚れになる」といった着衣などを対象とする敬語に着目し、人の所有物は、譲渡不可能なもの、譲渡可能だが所有者に近いもの、譲渡可能で所有者から遠いものという傾斜をなし、譲渡可能所有物でも所有者と同一視できるほど所有者に近いものは、その所有者と等しく尊敬語化の対象になるとした。また、廣瀬は、話し手と他者の距離感から日本語の代名詞「自分」を研究し、「山田は、学生時代、自分の車に乗っていた」といった視点用法の「自分」を使うと、文中の山田は話し手が自分の客体的自己を投影した他者、つまり話し手に近い他者とされることを明らかにした。角田の所有傾斜に似て、廣瀬も話し手と他者の中間に客体的自己を置く階層を提案している。

本研究は、角田の所有傾斜、廣瀬の視点階層、Culicover and Jackendoff (1995) の “Residual Binding Theory”、の3者を統合し、発展させたものと位置づけられる。

日本語では代名詞「自分」の他に、身体部位名詞も照応詞として使われ、「自分」とは異なる意味の照応関係が表される。例えば、

英語では同じ *train oneself* と言うところを、日本語では、仕事などの能力を鍛える時は「自分を鍛える」と言い、物理的に身体を鍛える時は「体を鍛える」と言う。照応詞的身体部位名詞は、他動詞を自動詞的に変える役割の目的語としても使われる。「座る」の意味で「腰を下ろす」と言い、「遠くに出かける」の意味で「足を延ばす」と言うように、ある動作を表す時、その動作で主に使う身体部位が動詞の目的語になり、先行詞、つまり同一節内の主語の指示対象の一部を表す。

英語でも *one's mind* のような身体部位名詞は再帰代名詞と共通した文法的特徴を示す。再帰代名詞は先行詞と性・数が一致するが、*The poor girl lost her mind. /*The poor girls lost her mind. /The poor girls lost their minds.* のように、身体部位名詞も動詞の目的語の位置では同様の一致を示す。さらに、身体表現の一環をなす慣用句で使われる衣服名詞がある。「節約する」の意味の *to tighten one's belt* では、主語が *he* だと、*He tightens his belt.* になり、主語が *we* だと、*We tighten our belts.* になり、先行詞の主語と性・数の一致を示す。照応詞としての衣服名詞が興味深い理由は、それが身体部位名詞とは違い、先行詞の指示対象の一部を表すとは言えず、先行詞の指示対象に隣接する異物を表すという点にある。これは、人が自己とする領域が、身体から身のまわりの道具へと拡張したことの反映である。本研究では、身体表現や自己表現を通言語的に調査し、照応詞は、再帰代名詞や「自分」といった特定の語群によって占められたものではなく、一定の意味的基準を満たす語彙名詞句などに開かれたものであることを明らかにした。

2. 研究の目的

文法研究の立場から、道具を身に付けて使うことにより、人が自己の領域を拡張する過程の解明を目的とした。衣服や道具など、譲渡可能所有物を表す名詞でありながら身体部位を表す名詞と等しく扱われ、「異物の自己化」と呼ぶべき特徴を示すものがあることを明らかにし、それを動機付ける原則をメトニミーと語用論化の視点から探求した。応用的側面としては、道具を表すことばの文法的特徴、道具を通じた自己表現の方法、道具に言及した慣用句の特徴などについて通言語的に有効な分析方法を開発し、学習者が自分の経験から外国語が理解できるようになる文法モデルを提案することを目的とした。

本研究の成果から、身体部位を表すことばの文法的特徴と自分が身に付けて使う道具を表すことばの文法的特徴の共通点を理解し、そこから同一文内照応関係の理解へと発展させるという外国語教育のステップが得られる。これにより、外国語の学習者は自分

の経験と生活習慣に基づいて外国語の慣用句を理解することができるため、使える文法として習得されると考えられる。

異物の自己化は、鬘や入れ歯から始まり、心臓ペースメーカーやロボットスーツなどの医工学の最新技術により実現してきている。技術の世界での変化が文法の世界をどのように変えるか、新技術をことばで表す際に文法がどのような制約を与えるかといった問題設定は 21 世紀の今日にして初めて可能なものであり、言語研究の領域では先駆的である。人が自己とする領域を技術的に拡張できるようになり、この時代にあった文法を提案することが今日の言語研究の課題である。

3. 研究の方法

従来の言語研究では、譲渡可能所有物を表すことばと譲渡不可能所有物を表すことばの 2 分法が採用されてきたが、これは、人が道具などの譲渡可能所有物を自己の一部とすることが可能になった現代では、見直されるべきである。人は経験を通じ、自己の領域を身体部位から自分の社会生活を構成する道具や手段へ拡張することができる。この拡張に伴い、本来は身体部位を表すことばに特徴的に見られた表現が譲渡可能所有物を表すことばからも作られる。これは、譲渡可能所有物が文法的に身体部位に同化するという意味で、異物の自己化として把握できる。

例えば「{青い瞳のサリー/サリーの青い瞳} が嬉しそうだった」のような身体部位名詞に特徴的な語順の交替が「閉会式では {汚れたユニフォームの北島選手/北島選手の汚れたユニフォーム} が誇らしげだった」のような衣服を表す名詞にも見られるといった言語事実は、異物の自己化を反映しており、この種の事例は特に人の自己について述べる再帰的表現に多く観察される。

異物の自己化は語用論的な知識に基づく表現方法だが、再帰的表現に伴う照応関係を足がかりにして、異物の自己化を表す慣用句や指示の転移などの修辞表現に統語論的分析が与えられるため、ここから語用論と統語論の統合のモデルを示すことができる。さらに、異物の自己化は通言語的に観察できるが、どの異物が、どのように身体と同一視されるかという点では言語間の違いがある。異物の自己化について言語間での共通点と相違点を明らかにし、各言語の個別性、道具の由来と文化的背景、身に付けて使う道具から身体接触のない道具に至る身体との距離感、その距離感に伴う異物の自己化の段階と種類、新しい道具の創出とそれを表すことばの特徴といった項目で事例研究を積み重ねた。

統語論的には、再帰代名詞の照応の特徴を応用し、身体部位を表す再帰代名詞と衣服など人が身に付けた道具を表す名詞に共通の

同一節内照応の特徴が認められることを指摘した。語用論的には、隣接関係に基づくメトニミーの表現方法を応用し、衣服や乗り物など身体に隣接した異物を通じて人の身体領域が拡張する過程を明らかにした。道具を表すことばについての統語論知見と語用論的知見を統合し、統語論研究にもインパクトのある語用論の研究方法を具体化した。異物の自己化について言語間での共通点と相違点を明らかにし、各言語の個別性、道具の由来と文化的背景、身に付けて使う道具から身体接触のない道具に至る身体との距離感、その距離感に伴う異物の自己化の段階と種類、新しい道具の創出とそれを表すことばの特徴といった項目で事例研究を積み重ね、人の生活習慣と文法との関係を明らかにした。

4. 研究成果

本研究で得られた知見に文法的同化がある。これは、2つの異なるクラスの語彙項目について、両者の指示対象の使い方に共通点があると、当該語彙項目は互いに共通した文法的特徴を示すようになることを指す。一方のクラス A に顕著な文法的特徴がある場合、他方のクラス B の語彙項目は文法的同化により、クラス A の特徴を全体的または部分的に示すようになる。ここでの異物の自己化も文法的同化に該当し、異物と身体部位の使い方に共通点があるため、異物を表すことばが人の自己を表すことばに文法的に同化する。

文法的同化の観点から、上記の所有傾斜、視点階層など、中間段階を認める理論を検討した。例えば、角田の所有者敬語は、尊敬語は人が主語の文で使うのが基本だが、譲渡可能所有物でも尊敬される人の所有物であれば、その人と等しく尊敬語を使うことができるという事実を捉えており、ある人の所有物への尊敬表現が、その人本人への尊敬表現に同化した例として把握することができる。

日本語で衣服を表す名詞が示す語順の交代も文法的同化の一例である。このように本来は自分の一部ではない異物でも自己表現の道具であれば、文法上、照応詞と等しい扱いを受ける。このため、譲渡不可能所有と譲渡可能所有という 2 分法を見直し、自己に近い異物という中間段階を認めることになる。

文法の拡張、中間段階、文法的同化といった概念の理論的基盤を確かなものにするため、関連する諸表現を分析した。例えば、英語の無生物主語の他動詞文に見られるような擬人化 (personification) は、人でないものを、文法上、人と同じく扱う表現であり、文法的同化の一種である。慣用句や修辞的表現には同様の例が豊富にある。何にどう同化し、どのような動機付けにより同化するかといった問題に取り組んだ。衣服、車、家などの道具を表す名詞が同一文内照応の再帰代

名詞に文法的に同化する程度に基づき、人と道具の距離感が表され、人の生活習慣と文法との関係を明らかにすることができる。

本来は異なるクラスに属す表現群が同じ文法的特徴を示すようになる過程の分析には歴史的考察が必要だが、Onodera (2004) *Japanese Discourse Markers* などの語用論化(pragmaticalization)の知見を摂取し、文法的同化を提唱する理論的基盤を強固なものにした。語用論化は、談話標識の成立などの説明理論として言及されるが、本来の機能から別の機能へ転用された表現一般に適用可能な説明力を持つことを明らかにした。

このような転用の代表例は、照応表現のバリエーションである。新聞などの報道の文体でよく使われる照応表現に、例えば、「イチローは今日もヒットを2本打ちました。マリナーズのライトは今年も好調です」といったタイプの談話がある。ここで2番目の文での「マリナーズのライト」は「イチロー」に照応しているが、同時にイチローについて別の特徴も述べている。このような言い換えによる照応は英語にも多い。しかし、先行研究では、この種の言い換え的な照応表現はほとんど議論されてこなかった。これには理由があり、「マリナーズのライト」のような名詞句は、he や「彼」といった表現とは違って、それ自体が照応表現ではないからである。報道での言い換え的な照応とは、単独では照応表現ではないものを話し手と聞き手に共有された世界についての知識により照応表現に同化させて使うようにした言い方である。

これまでの語用論の研究はもっぱら、この表現は、この条件では、このように使うという単純な使い方を設定していた。しかし、ことばは使用の過程で別の機能へと転用され、転用の結果が慣習化し、新しい機能を担うことができる。文法的同化は、このような言語使用の実体を捉える概念であり、今後の語用論研究は、ことばの転用やバリエーションを説明する原則を探求しなくてはならない。

以上の研究成果を踏まえ、対照言語学の観点から、ことばが時代とともに語義と文法的機能を拡張していく実体を調査し、その拡張の方向性を規定する語用論の原則を探求した。語用論と統語論の統合の具体例を示し、その理論的基礎になる論文を発表した。この最も身近な例として日英語の人を表すことばの照応的用法に焦点を当て、語句レベル、文レベル、談話のレベルを連動させる対照言語学的研究の方向を確かなものにするとともに、今後の展開に向けた課題を抽出した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

全て単著

① Koichi Nishida (2009) “Notes on the Differences between English Personal Pronouns and Their Apparent Japanese Counterparts,” *Tsukuba English Studies* 27, pp. 97-104.

② Koichi Nishida (2008) “An Implicature-based Account of the Choice of Anaphoric Forms,” *日本語用論学会 第10回『大会発表論文集』第3号(Proceedings of the 10th Conference of the Pragmatics Society of Japan)*, pp. 247-254.

③ Koichi Nishida (2007) “Pragmaticalization and the History of Japanese Discourse Markers: Review Article on Japanese Discourse Markers: Synchronic and Diachronic Discourse Analysis, by Noriko O. Onodera, John Benjamins, Amsterdam, 2004, xiv+251pp,” *English Linguistics* 24.1, pp.184-211.

〔学会発表〕(計2件)

全て個人発表

① Koichi Nishida “An implicature-based account of the choice of anaphoric forms,” 2007 日本語用論学会 (The Pragmatics Society of Japan) 第10回 (2007年度) 大会, 2007年12月9日, 関西外国語大学, 大阪府枚方市.

② Koichi Nishida “Definiteness, Indefiniteness, and Anaphoric Relations in English,” 2007 the Poetics and Linguistics Association Annual Conference in Japan, 2nd August 2007, Kansai Gaidai University, Hirakata, Osaka, Japan.

〔その他〕

ホームページ等

Koichi Nishida “Definiteness, Indefiniteness, and Anaphoric Relations in English.”

<http://www.pala.ac.uk/resources/proceedings/2007/nishida2007.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田 光一 (NISHIDA KOICHI)

東北大学・大学院情報科学研究科・准教授
研究者番号：80326454

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：